



Top Message

“思い”をまっすぐ伝えること それが「相互信頼」の原点

“安心の継続”という社会的責任

私たち日本ユニシスグループは「ICTが人と社会にできること」をCSR活動のスローガンに掲げ、ICTという本業を通して、お客さまの情報システムはもとより、持続可能な社会形成に広く貢献していくことをめざしています。企業経営インフラとしての情報システムを提供していくうえで、「スピード」とともに「安定性」「持続性」が求められているなか、日本ユニシスグループでは、情報システムの提案から構築、運用に至る一貫したサービスを通じて、お客さまから長期的なビジネスパートナーとして信頼いただけるよう努めていきたいと考えております。

近年、震災や新型インフルエンザ感染などの災害時における事業継続が企業にとって喫緊の課題となっているなか、当社グループでは2006年からグループ企業全体で事業継続の取り組みを推進し、平時より、具体的な行動レベルでの対策・訓練を積み重ねています。2009年4月

以降の世界的な新型インフルエンザ感染拡大時にも、ホームページ上で公開している行動規程および対応状況をお客さまと共有し、情報システム稼働継続のための的確な対応を取ることができました。

お客さまの重要な資産であり社会インフラでもある情報システムを構築・運用する企業として、これからも長期にわたって“安心”いただけるサービスを提供し続けるための方策を取っていくことが、当社グループにとっての重要な社会的責任であると考えます。

自らも変革に挑戦していく

一方、社会環境の激しい変化のなかで、事業活動を通じた社会への貢献をし続けていくためには、技術的な革新はもちろんのこと、まず私たち自身が“変革”に挑戦し、体感していくことが大事であると考えます。

たとえば、世界中のコンピュータの稼働率は2割程度に

過ぎないと言われていますが、クラウドコンピューティングによりコンピュータの容量を有効活用していくことができれば、残りの8割を利用していくことが可能となります。これにより、地球温暖化対策の視点では大幅なCO₂排出量削減につながるだけでなく、経営の観点においてもコスト削減をはじめとする多大なメリットを生み出すことができます。

日本ユニシスグループでは、2007年以降、ICTを活用した環境志向型オフィスへの改革として、グループ企業内におけるサーバの統合化や社内向けクラウドコンピューティングサービスの試行を実施していますが、このような自らの経験・ノウハウを踏まえたサービス・ソリューションこそ、本当の意味でお客さま目線に立った「提案」になるのではないのでしょうか。そうした意味では、当社グループにおいてワークライフバランスなどの観点から一定の成果をあげている“テレワークの活用”についても、同様のことが言えると思います。

ICTはいまや社会インフラとしてお客さまのビジネスや社会生活のなかに定着しつつありますが、十分活かしているかという点、まだまだ不十分だと考えます。従来のような業務の効率化や利便性の向上にとどまらず、未来につながる「ICTが人と社会にできること」の可能性について、私たち自身もお客さまとともに考え、実践していきたいと思っております。

「人」が信頼を創出する

日本ユニシスグループでは、2010年のビジョンとして「システムインテグレートからサービスインテグレートへ」を掲げています。すなわち、従来のような“情報システム”という枠のなかでの価



日本ユニシス株式会社
代表取締役社長

もみい かつと
榎井 勝人

値提供にとどまらず、世の中の変化や将来的なニーズを見据えたサービスを創出し、提供していく。これらによってお客さまからのより一層の「信頼」を得ていくことをめざします。

そのためには、「サービスインテグレート」となるべき社員一人ひとりが、お客さまのご要望に耳を傾けるだけでなく、自身が描いている「ICTが人と社会にできること」について、積極的に“思い”を伝え行動に移していくことが大切であると考えます。ICTの分野では、となくテクノロジーや機能面ばかりが重視されがちですが、それらを提供していく主体が「人」である以上、人間らしい飾らない思いや考えを伝えていくことが、より深い相互理解や信頼関係につながっていくのではないのでしょうか。経営の立場としては、そうした社員の企業人としての成長を支援していけるよう、引き続き会社の制度や仕組みを通じて、働きやすい環境づくりに努めてまいります。

今回のCSR報告書は、従来までの“読みやすい、わかりやすい、読んでみたい”という編集方針に加えて、より社員一人ひとりに焦点を当てることをテーマに、各分野のCSR活動を紹介しています。一人ひとりのメッセージのなかから、私たちの活動内容について理解を深めていただくとともに、その根底にある“思い”を感じ取っていただければ幸いです。そして、多くのステークホルダーのみならず、忌憚のないご意見をお待ちしております。

